

昭										年 月 日	略 歴	要 略
17	17	17	16	16	16	16	16	16				
12	7	1	12	12	10	10	9	9				
5	28	25	22	16	5	4	26	18				
小倉西部第六六部隊に於て編成完結。 門司出発。 南支那広東省虎門到着。 広東河南上陸、爾後碇泊場業務に従事す。海南島海口、仏印「カムラン」に転進。 英領「ボルネオ」「ミリー」附近上陸戦参加。 英領「ボルネオ」「クチン」附近上陸戦参加。 作戦終了後、本部は「ミリー」に到着、碇泊場を開設す。 蘭領「ボルネオ」進攻作戦参加（碇泊場司令部の一部） 本部は「ボルネオ」「クチン」に移駐。 「チモール」島に移駐の為「クチン」出発途中、昭南及び「スラバヤ」に寄港												

0640

昭										
21	21	21	21	21	20	20	19	19	18	17
6	6	6	6	5	12	9	10	1	2	12
13	12	2	1	30	1	2	4	10	22	22
す。 「チモール」島「クーバン」に上陸。 「アンボン」島に到着。 敵機米襲の際、碇泊場司令部爆撃を受け焼失、爾後、「アンボン」島「ワイヤメ」村に於て業務を続行す。 「アンボン」を出発し「セラム」島「ビル」に転進、業務を続行すると共に現地自活作業に努む。 「セラム」島「ビル」に於て終戦。 「セラム」島「ホアマ」半島「タラガ」に集結、自活作業に努む。 復員準備の為「アリアテ」に集結。 復員船（V 23）に乗船。 「アリアテ」港出発。 名古屋上陸。 復員。										

0641

5202

初代	二代	三代	四代
少佐	中佐	中佐	大佐
浅尾	布施	森山	渡辺
時正	翌重	二郎	栄

0642

昭和									年 月 日	略 歴	摘 要
18	16	16	16	16	16	16	16	16			
2	12	12	10	10	9	9	9	9			
	8	4	4	1	30	26	18	10			
特臨編第七号に依り臨時編成下令。 北九州小倉に於て編成完結。 門司港出発。 高雄港着。 高雄港出発。 南支広東着。教育訓練後海南島に集結。 海南島発。 「マレー」半島「コタバル」上陸作戦に参加。爾後「ペナン」港に移動、碇泊 場業務に従事、次で「ニューブリテン」島「ラバウル」に転進し碇泊場業務に 従事。 三月下旬まで「ガダルカナル」島撤退作戦に参加。											

第四九碇泊場司令部

略歴

0643

19	19	19	19	19	18	18	18
4	4	4	3	3	12	12	4
22	21	14	24	11	7	3	上旬
「ニューギニア」島「マダン」に到り一二月二日まで該地に於て碇泊場業務に従事。 「マダン」出発。 「ニューギニア」島「ウエワク」着。 昭和一九年三月二〇日迄「ウエワク」に於て碇泊場業務に従事。第三期「ニューギニア」船舶作戦に参加 副官小川中尉以下先発隊として海「トラ」厚丸に乗船「ウエワク」出発。 「ホルランヂヤ」に向いしも「ウォオルマン」北方六〇哩に於て敵機「ノースアメリカン」八〇機の攻撃を受け厚丸沈没乗員戦死。 二六日、二八日、三〇日の四日に亘り部隊約二〇〇名は四梯団となり夫々「ウエワク」出発「ホルランヂヤ」に向う。 「アイタベ」着。 「ヴァニモ」着。 「ヴァニモ」出発「ホルランヂヤ」に向う途中「タミ」河附近に於て敵「ホル							

0644

	21	21	20	19	19	19	19
	6	6	9	7	5	5	5
	18	3	2	25	25	3	2
中佐 岡田英夫	ランヂヤ」に上陸しあるを知り「アルソ」に向う。 「アルソ」着。 「ホルランヂヤ」部隊は既に「ゲニム」に転進せるを知り「ゲニム」に向う途中糧食の欠乏「マラリヤ」り病疲労迷路滞留等にて行軍の統一を失し「アルソ」 「ゲニム」間に於て殆ど全員状況不明となる。 峰少尉のみ「ゲニム」附近に到着せしも敵既に「ゲニム」を占領し、友軍は 「サルミ」に転進しあるを知り「サルミ」に向う。 峰少尉「サルミ」守備隊着。 「ニューギニア」島「サルミ」に於て終戦。爾後「サルミ」に於て現地自活。 「サルミ」出発。 名古屋上陸復員。						
部隊長							

0645

第五二倅泊場司令部									年 月 日	略歴	
(暁第九二五七部隊)										略	歴
18	17	16	16	16	16	16	16	16	昭	15	軍令陸甲第四二号に依り編成下令。 旭川に於て編成完結。 船舶輸送司令官の隷下に入る。 高雄着次期作戦準備に従事す。 高雄出発大東亜戦参加の為征途につく。 比島「リンガエン」湾に上陸し同地に在りて船舶輸送業務に従事す。 「マニラ」に転進し引続き船舶輸送業務に従事す。 軍令陸甲第三四号に依り現地復帰し第三船舶輸送司令部「マニラ」支部に改編せらる。
6	5	12	11	9	9	9	9	9			
10		22		18			17				
部隊長 大佐 大町 茂											

0646

至 自										昭	年 月 日	第五三 碇泊場司令部 (暁第九二五九部隊)	略 歴	略 歴
20	20	19	19		18	18	18	18	18	18				
9	9	12	5		10	9	8	8	8	7				
2	2	1	10		2	26	10	10	7	26				
得撫島に在りて終戦「ソ」連軍に武装解除された後入「ソ」 得撫島に在りて北方第二次作戦準備並びに船舶輸送業務及び警備に従事。 児島湾の築港作業に従事。(十二月完成) 事。 千島得撫島に上陸、同日より北方作戦準備並びに築港作業、船舶輸送業務に従事。 小樽港出発。 小樽港着。 旭川出発。 旭川に於て編成完結。 軍令陸甲第三一号に依り編成下令。														
												摘要		

0647

部隊長 少佐 若田宗市

0648

昭 和 年 月 日							略 歴	摘 要
20	20	20	18	18	18	18		
9	8	8	12	10	8	8	第五六碇泊場司令部（甲）編成下令。 台湾基隆市に於て編成完結。爾後、同年一〇月五日迄台湾駐留。 台湾より「ハルマヘラ」島に転進。（「シンガポール」「ジャワ」「セレベス」「アンボン」經由） 「ハルマヘラ」島警備（輝第一、乃至第三号作戦参加） 同地に於て南方水域船舶作戦業務に従事す。 現地復帰、同日、主力（四七三名）は「ハルマヘラ」島に於て船舶工兵第一八連隊に、一部（一〇名）は「セレベス」島「メナド」に於て第三船舶輸送司令部第三支部に夫々充用、 主力は「ハルマヘラ」島に於て終戦。	
2	15	14	5	6	12	1		

0649

昭和									年月日	略	歴	摘要
19	19	19	19	19	19	19	19	19				
5	4	3	3	3	3	3	3	3				
10	28	24	20	19	12	8	5	3				
臨時第一碇泊場司令部編成下令。 広島に於て編成完結。 横浜駅着横浜港出発。勤務中隊は石巻に移動、同地に於て終戦。 木更津沖出発。 サイパン入港。 サイパン出発。 トラック島入港夏島上陸。 輸送業務に従事。 軍令陸甲第四二号に依り第五八碇泊場司令部編成下令。 「トラック」島に於て編成完結。（臨時第一碇泊場司令部を基幹とす）引続き 「トラック」地区の輸送業務及び守備に任ず。												

0651

自							
	20	20	20	20	20	20	20
	12	12	12	12	8	9	
	14	12	1	1	26	2	
軍令陸甲第四三号に依り現地復帰、現地軍に編入。 「トラツク」島に於て終戦。 復員業務に従事。 「トラツク」港出発。 「大竹」港上陸 復員							
部隊長 中佐 中野 潭							

0652

至 自						昭	年 月 日	第五九碓泊場司令部 (暁第一六七二部隊)	略 歴	摘 要
21	20	20	20	20	19	19				
4	9	9	3	2	5	4				
27	12	2	17	18	10	12				
内地復員。						軍令陸甲第四二号に依り編成下令。	略	略	歴	要
主力は父島に於て終戦。						父島に於て特設第五九碓泊場司令部の人員を以て編成完結。				
一部二九名は硫黄島に於て玉砕す。						同日船舶司令官の隷下に入り主力は父島に在りて中部太平洋方面の船舶輸送業務に従事し一部を硫黄島に派遣す。				
大陸命第一二五四号を以て現地に在りて東京船舶隊の編成に入る。										
部隊長 少佐 松村 昶										

0653

第六〇 碇泊場司令部			昭和	年月日	略	歴	摘要
(暁第一六七二三部隊)							
19	19	19					
7	5	4					
18	10	12					
部隊長 少将 齊藤 肇			軍令陸甲第四二号に依り編成下令。 「サイバン」に於て編成完結。 爾後同方面の船舶輸送業務に従事す。 全員玉砕。				

0654

昭									年 月 日	略 歴	摘 要
19	19		19	19	19	19	19	19			
7	7		7	7	7	7	7	5			
20	19		16	15	14	3	1	8	5		
和歌山県和歌山市船舶工兵第九連隊補充隊にて編成完結。山本中尉以下八三名。 教育訓練、和歌山市称名寺に宿泊。 和歌山出発、門司へ向う。 門司港において「シヤトル丸」に乗船出発。 高雄港寄港。 高雄港出発。 「バシー」海峡に於て敵潜水艦の雷撃により沈没せしも全員無事、四隻の僚船 に救助せらる。 夜半四隻の内二隻再度の雷撃により轟沈、山本晴造中尉以下二四名生死不明。 「マニラ」港着。同夜上陸。小橋少尉以下五九名。 「マニラ」野戦貨物廠勤務。											

0655

	20	19	19	19	19
	9	10	9	9	8
	2	上	12	4	24
「マニラ」出発「セブ」島へ向う。 「セブ」市に上陸、第三船舶輸送司令部「セブ」支部勤務。 「セブ」市初空襲を受ける。 「セブ」沿岸守備隊に編入せられ「タリサイ」「マンバリン」間の沿岸防備の第一線に配置せらる。 比島「セブ」島に於て終戦。 停戦に伴い戦斗行動を停止し、爾後生存者は所在の地点に於て武装解除された後米軍収容所に入る。					

0656

昭和										年	月	日	第六一砲泊場司令部 略歴	(暁第一六七二四部隊)	略歴	摘要
19	19	19	19	19		19	19	19	19							
6	6	6	5	5		5	5	5	5							
9	8	2	31	28		18	中旬	10	9	5						
「スソガオ」支部開設。 「カガヤン」支部要員出発。 「スソガオ」支部要員出発（石毛少佐以下）。 「ザンボアング」出張所開設。 「ザンボアング」出張所要員出発（松本中尉以下）。 揚陸隊を指揮下に入らしめらる。 比島「マニラ」着第三船舶輸送司令部の指揮下に入り船舶工兵第一九連隊第一九 主力門司発 門司港碇泊中の「うすりみ」丸船内に於て編成完結。 比島転進の命をうけ「うすりみ」丸に乗船宇品発。 軍令陸甲第四二号に依り広島に於て臨時編成下令。																

0657

昭											
20	20	20	20	19	19		19	19	19	19	19
2	1	1	1	12	12		11	11	10	6	6
25	26	21	20	10	10		25	25	25	24	17
勤務中隊佐々木中尉以下門司港出發。 「カガヤン」支部開設 勤務中隊「マニラ」到着。 「レイテ」船舶部隊輸送の為司令部を「カガヤン」に移動。 北部「ミンダナオ」島より「レイテ」島転進輸送実施 「ルソン」島より「レイテ」島への部隊転進。輸送処理の為司令部の主力を 「バナイ」島に推進すべき命をうけ「カガヤン」発。 「バナイ」島「イロイロ」着。 「レイテ」作戦に伴い「ネグロス」島に支部出張所を開設。 萩原中尉以下は司令部を追及の為「カガヤン」出發。 「セブ」島「西南方海上で遭難。 萩原中尉以下「セブ」島到着。 「地」号作戦参加の為「イロイロ」発「ネグロス」島「フアブリカ」着三船司 「セブ」支部井上大尉以下を以て「フアブリカ」支部を開設し「バコロド」支部											

0658

昭			
20	20	20	20
9	4	4	3
2	8	3	26
を併せ指揮す。 「地」号作戦中止「フアブリカ」支部復帰。 比島各地の戦況悪化に伴い司令部は「マングカン」山西方山麓第一〇二師団陣地に配備せられその指揮下に入る。 「マングカン」山岳地帯に於ける戦斗に参加す。 比島「セブ」島に於て終戦。 停戦に伴い戦斗行動を停止し爾後生存者は所在の地点に於て武装解除された後米軍収容所に入る。 部隊長 中佐 小金徳助			

0659

昭和十九年									年月日	略歴	摘要
21	21	20	20	20	19	19	19	19			
3	3	9	6	4	9	6	6	6			
30	29	2	12	中	1	29	26	26			
昭十九年軍令陸甲第六九号により広島市宇品に於て編成完結。第三船舶輸送司令官の隷下に入る。 宇品出発。 北「ボルネオ」の「ゼツセルトン」に上陸。一部「クチン」「ミリー」に展開。船舶輸送業務に従事。 本部を「ゼツセルトン」より「ブルネー」に移動。 米軍「ブルネー」上陸により「サボン」に転進。 北「ボルネオ」に於て終戦。 終戦に伴い「ゼツセルトン」地区収容所に収容。 二名の現地残存者を除き生存者全員大竹港上陸。 復員											

0660

部隊長 大佐 唐原勘治

0661

昭和										年
20	20	20	20	20	19	19	19	19	19	月
9	6	5	3	1	8	7	7	6	6	日
2	中旬	1	中旬	4	13	20	17	29	26	
軍令陸甲第六九号に依り宇品に於て編成完結。 宇品出発。 「バシー」海峡に於て米潜水艦の雷撃を受け輸送船沈没し約八〇名戦死。 「マニラ」に上陸し同地に於て兵員の補充を受け「マニラ」港揚陸作業に従事。 「マニラ」より「サンフェルナンド」に前進し同地に於て揚陸作業に従事。 北部「ルソン」「アパリ」に転進を命ぜられ一部は海路主力は陸路を北進。 「アパリ」に到着。 状況悪化し、地上戦部隊となり比島東北端「カサブラガン」附近に転進 米比軍と交戦。 比島「ルソン」島に於て終戦。 停戦に伴い戦斗行動を停止し爾後生存者は所在の地点に於て武装解除された後										略
										略歴

第六三砲泊司令部
略歴

(暁第一六七四六部隊)

0662

米軍収容所に入る。	
部隊長	中佐 佐藤 操
（以下、詳細な収容所生活の記録が記述されているが、本文では省略する）	

0663

昭和										年
20	19	19	19		19	19	19	19	19	月
5	10	10	10		8	7	7	7	7	日
8	13	9	6		1	30	27	23	21	日
第六四 碇泊場司令部 略 歴 (暁第一六七五部隊) 宇品船舶練習部に於て特設第六四碇泊場司令部の編成に着手。 編成完結。 下関港出発。 鮮満国境通過。第二船舶輸送隊長の指揮下に入る。 船参編第一五〇号に依り第六四碇泊場司令部編成着手。 編成完結。上海及び南京に於て碇泊場開設に伴う諸業務及び碇泊場業務教育を実施す。 二船司作命甲第八九一号に依り呉湊発。 南支福建省廈門島に上陸し廈門島警備並に碇泊場業務を開始す。 独立歩兵第一三六大隊の金門島進駐作戦に参加。 在金門島独立混成第三一連隊の広東転進に伴う上陸作戦及び海上輸送業務並に厦										略 歴
										摘要

0664

昭和										年	月	日	第六五碇泊場司令部 略歴
20	20	20	19	19	19	19	19	19	19				
8	6	6	10	10	8		8	7	7	7			
7	9	2	4	2	4		1	23	21	19	略歴		
上海発。	上海着。	七里村発。	楽清県七里村上陸。	上海発。	呉淞到着。同地附近の警備並に教育訓練。	同日第二船舶輸送隊長の指揮下に入り釜山出発。	釜山に於て第六五碇泊場司令部編成完結。	釜山上陸。	広島に於て仮編成完結。同日広島出発。	軍令陸田第四二号に依り特設第六五碇泊場司令部仮編成下令。		歴	
										摘要			

0666

昭	20	20	20	20	20	20
8	11	11	11	11	9	8
1	24	21	20	18	2	1
北支山東省青島着。	佐世保上陸。復員。	青島発。	乗船。	青島郊外滄口地区に集結完了。	山東省勞西區沙原口鎮姜哥莊附近に於て終戦。	
	部隊長				少佐	新田 他家次

昭和							年
21	20	19	19	19	19	19	月
5	9	12	12	11	10	10	日
	2	13		13	12	8	
部隊長 中佐 小山 滋 復員 西貢に於て終戦。 仏印「カムラン」着。爾後仏印地の船舶輸送業務に従事す。 「マニラ」出発。 「マニラ」着。 門司出発。 門司に於て編成完結。							略
							歴
							摘要

第六六碇泊場司令部 略 歴

(暁第一九七七八部隊)

0668

昭								年 月 日	略 歴	摘 要
21	20	20	20	20	20	20	20			
3	9	4	3	2	2	1	1			
	2	15	10	28		13	3			
徳山海上駆逐隊、徳山機動輸送大隊より転属せる兵員を基幹とし門司に於て編成完結。 台湾派遣のため門司港出発。 予定を変更し上海上陸。 軍令陸甲第一九号により特設第六七碇泊場司令部の人員を基幹として上海に於て編成完結。 第二船舶輸送司令官の隷下に入る。 第一三軍司令官の指揮下に入り軍水路輸送隊を編成し蘇州を中心として船舶輸送業務並ひに光号作戦準備に従事す。 蘇州に於て終戦。 二一日より遂次上海出発。										

第六七碇泊場司令部

(暁第一九七七部隊)

略歴

0669

	21	21
	6	3
	1	24
一二七名博多上陸復員。 司令官以下六九名鹿兒島上陸復員。 部隊長 少佐 野間 秀吉		

0670

年 月 日		昭
		20
		3
		15
20	20	
9	4	
2	下旬	
部隊長		略
少佐 寄崎 晋一郎		略
馬来に於て終戦。		略
第三船舶輸送司令部「ビル」支部現地復帰し当司令部に編入せらる。		略
馬来、「シンガポール」方面に対する船舶輸送業務に従事す。		略
(馬来船舶隊と称す)「ハツチエン」(仏印)「パカナム」(タイ)等より、		略
爾後主力は「シンゴラ」に位置し「コタバル」「クワンタン」に支部を「カルシン」「トレヌガン」「テーバー」に派遣隊を配置し馬来船舶諸隊を指揮し		略
泰国「シンゴラ」に於て編成完結。		略
摘要		略

0671

昭			年 月 日	船 砲 兵 団 司 令 部 (暁第六一八〇部隊) 略 歴	略 歴	摘 要
20	20	19				
9	9	11				
25	2	2				
注、この部隊の所屬者は船砲隊の隊長又は衛生部要員として陸軍徴傭船舶に 乗組み対空、対潜警戒並に防護に従事していたので乗組間の行動は「陸 軍徴傭船舶行動調書」に記載されている。当該船舶の行動を参照する事。			軍令陸甲第一四一号に依り広島に於て編成完結。 広島に於て終戦。 軍令陸甲第一一六号に依り復員。			
部隊長 初代 中将 三島 義一郎 二代 少将 中井 千万騎			略			

0672

昭和										年	月	日	略	歴	摘要
18	17	17	17	17	17	16	16	16	16	8	7	26			
8	7	7	3	1	1	12	10	8	7						
26	31	7	1	18	12	8	10	5	26						
軍令陸甲第四二号により船舶高射砲連隊編成下令。 広島に於て編成完結。 連隊本部、材料廠、高射砲二大隊（一大隊は三中隊）高射機関砲一大隊（三中隊） 軍令陸甲第六二号により船舶高射砲第一連隊と改称。 「マライ」上陸作戦及び比島上陸作戦参加。 軍令陸甲第九七号により編成改正下令。 広島に於て編成改正完結。 「ジャワ」上陸作戦参加。 軍令陸甲第九七号により編成改正下令。 広島に於て編成改正完結。同日船舶砲兵第一連隊と改称。 船作命甲第四四五号に基き教育隊比島派遣のため広島出発。															

船舶砲兵第一連隊

（暁第二九五三部隊）

略歴

昭									
20	20	20		19	19	19	19	18	18
8	3	3		10	9	8	7	9	9
15	20	17		30			15	15	10
教育隊「マニラ」着。 教育隊比島「イロイロ」着爾後同地において警備並びに教育訓練に従事す。 船作命甲第五一六号に基き教育隊広島へ復帰のため「イロイロ」出発。 教育隊数梯団となり「マニラ」出発。 教育隊逐次広島着。 軍令陸甲第一四一号に依り船舶砲兵団司令部編成完結、連隊はその隷下に入らしめらる。連隊本部、教育隊、特別幹部候補生隊、材料廠、高射砲一五中隊、高射機関砲三中隊、野砲三中隊、爆雷一中隊、水中聴音機一中隊、対空監視一中隊、曲射砲一中隊、監視二中隊、機関銃一中隊、 軍令陸甲第五二号により編成改正下令。 福山において編成改正完結。 連隊本部、教育隊、高射砲一五中隊、野砲三中隊、材料廠、 日本海水域輸送作戦に参加。 福山において停戦。									

0674

	20	20
	9	9
	9	1
軍令陸甲第一一六号に依り復員下令。 復員完結。 註 この部隊の所属者は船砲隊の高射砲隊、野砲隊、爆雷隊等の要員として 陸軍徴備船舶に乘組み対空対潜警戒並びに防護に従事していたので乗組 間の行動は「陸軍徴備船舶行動調書」に記載されている当該船舶の行動 を参照すること。 部隊長 初代 大佐 大西 義明 二代 大佐 中川 多計士		

0675

昭和											年
18	18	17	17	17	17	16	16	16	16	16	月
9	8	9	7	7	1	1	10	10	10	10	日
3	13		31	20	18	12	19	15	14	10	日
昭南到着 大阪港出発 広島より大阪に移駐。 広島に於て編成改正完結。船舶砲兵第二連隊と改称 軍令陸甲第五二号に依り編成改正下令。 広島に於て編成改正完結。 軍令陸甲第九七号に依り編成改正要領により編成着手。 広島上陸。 上海発。 南京発。 南京に於て船舶高射砲第二連隊編成完結。											略
											歴
											摘要

船舶砲兵第二連隊

(暁第二九五四部隊)

略歴

0676

										昭
20	20	20	20	20		20	20	19	19	19
9	9	8	3	3		3	1	12	7	7
7	1	15	20	17			6	24	26	13
昭南出発。 比島「マニラ」に上陸。 北「サンフェルナンド」転進のため「マニラ」出発。 米艦隊の砲撃を受け直ちに北「サンフェルナンド」防衛の任につく、北「サンフェルナンド」「バギオ」「ラボック」「セブ」等に展開。 連隊は現地復帰し、在比島人員は第 師団に、在内地人員は再編成の船舶砲兵第二連隊および船舶機関砲第二連隊に在馬来人員は特設船舶砲兵隊に入らせしめらる。 昭和一七年軍令陸甲第五二号編成改正要領により船舶砲兵第二連隊再編成着手。 門司に於て編成完結。 門司に於て終戦。 復員下令。 復員完結。 注 この部隊の所屬者は船舶隊の高射砲隊、野砲隊、爆雷隊等の要員として、										

0677

部隊長

初代 大佐 大阪 一三

二代 中佐 並松 程一

三代 中佐 吉村 正作

陸軍徴傭船舶に乘組み対空対潜警戒並に防護に従事していたので乗組間の行動は「陸軍徴傭船舶行動調書」に記載されている当該船舶の行動を参照すること。

0678

			昭	年 月 日	船 舶 機 関 砲 第 一 連 隊 (暁第六一七八部隊)	
20	20		20			
9	9		3			
8	2		25	略 歴	略 歴	
部隊長 中佐 岩 見 小四郎			軍令陸甲第四三号に依り福山に於て編成完結。 連隊は常時陸軍徴傭船に分乗し船舶（船団）の対空対潜防護に任ず。 編成の概要 本部第一第二大隊（大隊は各機関砲中隊三） 第三大隊（大隊は機関銃中隊三） 編成人員四九二〇 福山に於て終戦。 軍令陸甲第一一六号に依り復員			
			摘要			

0679

注

乗船間の行動は「陸軍徴傭船舶行動調書」に記載されている。当該船舶の行動を参照すること。

0680

船舶機関砲第二連隊 (暁第六一七九部隊)	略歴	摘要
昭和 20 3 25 年 月 日	軍令陸甲第四三号に依り小倉に於て編成完結。 連隊は常時陸軍徴備船舶に分乗し船舶(船団)の対空対潜防護に任ず。 編成は船舶機関砲第一連隊に同じ。 門司に於て借戦。 昭和二〇年軍令陸甲第一一六号により復員完結。 部隊長 中佐 小川 英雄 注 乗船間の行動は「陸軍徴備船舶行動調書」に記載されている当該船舶の行動を参照すること。	

0681

昭						年 月 日	船 舶 情 報 連 隊 (暁第一九七七六部隊)	略 歴	摘 要
20	20	19	19	19	19				
9	9	11	10	5	5				
4	2	5	30	27	27				
船作命甲第四四一号に依り警戒機教育隊広島に於て編成完結。 軍令陸甲第一四一号に依り船舶情報連隊編成下令。 警戒機教育隊の人員を基幹として西宮に於て編成完結。 船舶砲兵団長の隷下に入る。 西宮に於て終戦。 軍令陸甲第一一六号に依り復員。 注、この部隊の所屬者は電波探索機要員として陸軍徴備船舶に乘組み対潜警戒並に防護に従事していたので乗組間の行動は「陸軍徴備船舶行動調書」に記載されている当該船舶の行動を参照すること。 部隊長 大佐 大西 義 明									

0682

		昭	年 月 日	特設船舶砲兵連隊 (暁第六一八〇部隊)
20	20	20		
9	6	3		
2	1	25		
部隊長		略		歴
馬來において終戦		三船作命甲第一三号に基き南方（比島を除く）地域にある船舶砲団司令部、船舶砲兵第一及び第二連隊の人員並に油槽船兵装強化要員を以て昭南「セシルロード」に於て編成完結。 連隊本部は昭南に位置し第一中隊は「カトン」岬第二中隊は聖雀、第三中隊は親島に展開し第四、五、六中隊の約三分の二は常時輸送船に分乗し附近海域において船舶の防護に任ず。 岡方作命に基き「シンガポール」防衛統一指揮のため部隊主力及び一般中隊の一部を以て港砲兵第一大隊を編成し同方面海上に対する築城を担当す。		
				摘要

0683

初代	大尉	佐藤三雄
二代	少佐	坂梨家満

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
<http://www.jacar.go.jp>

昭			年 月 日	略 略 歴	船 舶 砲 兵 教 導 隊 (暁 第 一 九 七 七 七 部 隊)
20	19	19			
9	11	10			
2	5	30			
部 隊 長 中 佐 佐 々 木 秀 綱 廣島に於て終戦。 船舶砲兵団長の隷下に入り船舶砲兵各隊の幹部候補生及び下士官候補者等の教育に任ず。 軍令陸甲第一四一号に依り編成下令。 広島に於て編成完結。					
			摘 要		

0685